3rd 前橋文化推進会議

第３回アーツなカフェ
「アーツなトーク 市長とアーツをアツく語る。」

2013 年 2 月 25 日（月）/ 元気 21 中央公民館 51/52 学習室

◇ HP　http://maebun.web.fc2.com/　◇ facebook　http://www.facebook.com/maebunsui　◇ twitter　http://twitter.com/MaeBunsui

■ はじめに

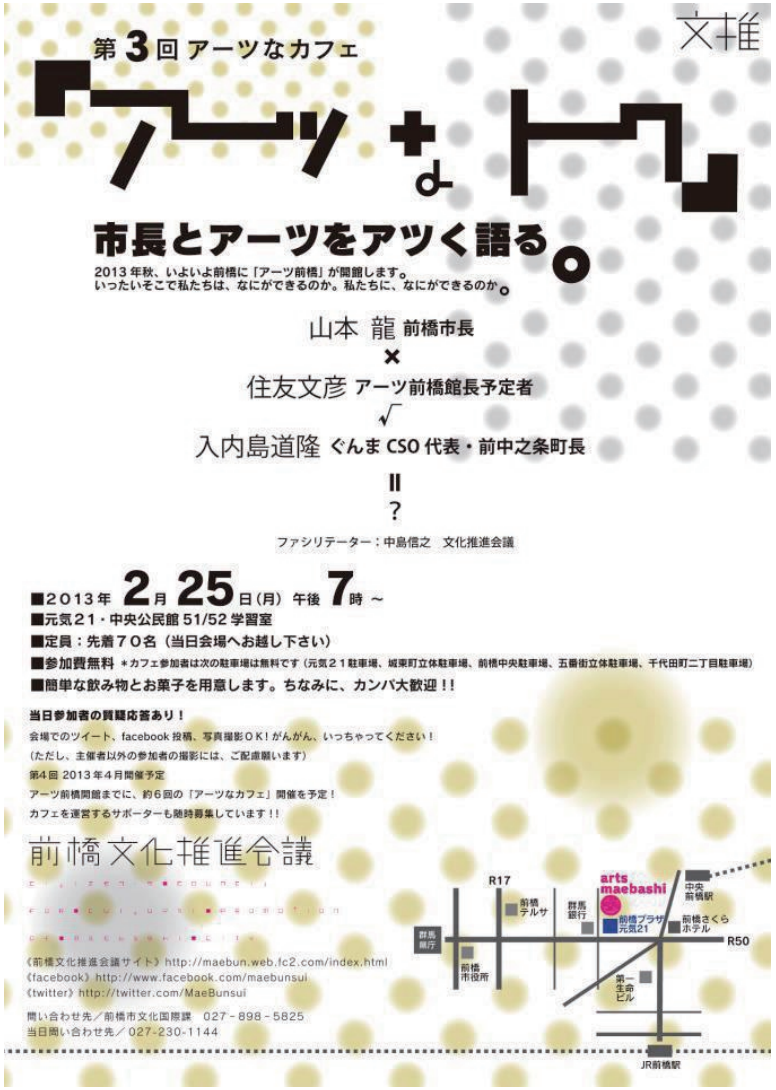
◆ 前橋文化推進会議は、『アーツ前橋』を中心に、「市民の手によって／新たな文化を生み出し・支え、維持し／発展させ、発信していくこと」を準備するための市民会議です。

◆ アーツなカフェは、前橋文化推進会議がご用意する、市民と市民の対話の場、市民と行政の対話の場、市民と文化・芸術の対話の場です。

◆ 第３回アーツなカフェ / 主催：前橋文化推進会議
日　　時：2013 年 2 月 25 日（月）午後 7 時～
場　　所：元気 21 中央公民館 51/52 学習室
参加人数：約 120 名
配布資料：なし

◆ 過去のアーツなカフェ
第１回：「アーツなカフェって、なんなん？」
日　　時：2012 年 10 月 21 日（日）午後 1 時～
場　　所：元気 21 中央公民館 55 学習室
参加人数：約 50 名

第２回：「今から考えなくっちゃいけないこと」
日　　時：2012 年 12 月 15 日（土）午後 3 時 30 分～
場　　所：元気 21 中央公民館 42 アトリエ
参加人数：約 40 名



＊第３回アーツなカフェ　チラシ

登壇者
山本 龍 氏（前橋市長）
入内島 道隆 氏（前中之条町長）
住友 文彦 氏（アーツ前橋館長予定者）

司会進行
中島 信之（前橋文化推進会議委員）

■ トークの主テーマは「市民参加の仕組み」
〇アーツ前橋の特徴や可能性、運営について

住友：アーツの特徴はまず繁華街にある点。作品鑑賞後にアーツ周辺の店で飲んだり食べたりしながらアートの話を多くの人と共有できる立地にある。また、元西武百貨店をリノベーションした施設であることも魅力の一つ。場所の記憶が残っていることは重要。ゼロからではなく、そこにあったものを引き継ぐことが出来る。1500 平米という中規模の大きさもポイント。独自の企画が展開しやすく大きな発信力を持ちうる。さらに、東京からも近くクリエイティブなことをする条件がそろっている。

山本市長：地域の記憶を引き継いでいる施設で、非常に可能性を感じる。

〇市民参加について

山本市長：市民自らが主体的に関われるような施設にする。文化と政治を切り離さないといけない。文推と住友館長にアーツ前橋の運営をゆだねる。市長としての最終目標は、アーツカウンシルを立ち上げ市民自らが施設の運営管理に携わっていく仕組みを作ること。

中島：現在、文推で市民参加の仕組みづくりに取り組んでいる。途中段階ではあるが、全体の運営を検討する理事会（仮称）、サポーターなど市民グループを総括的に管理できるような事務局機能を持つ組織、さらに外部チェックを行う市民組織を作りたい。これに対して意見がある方は？

参加者：市民参加の仕組み作りを進めているが、市民組織が出来ることがアートの向上にどう役に立つのか教えて欲しい。

住友：大阪、東京、京都、沖縄でアーツカウンシルを立ち上げようという動きがある。その目的は、文化政策について市民が考えていく場を作ると共に文化施設を持続的なものにしていくため。日本の土壌で、市民参加を実現するのは難しかった。なぜなら、多くの意見が出て混乱が起き、結局はまとまらないというケースがほとんどだったため。ただ、前橋の場合は混乱だけが残るこれまでの市民参加とは違う方向に踏み込んでいると感じている。昨年に立ち上がった検討委員会の提言書に書かれている内容「多様で質の高い文化が地域には必要」からは文化に対する市民の強い意志を感じる。そして、市民組織は、美術館の活動を透明にするという役割を持つ。良い点、足りない点などを指摘することで、美術館はもちろん市民との信頼関係も築ける。この信頼関係がなければ、議会で予算カットされても誰も何もいえない。持続可能な運営にするために、必要な組織であるこ

とは間違いない。

山本市長：運営管理を市民組織にゆだねる理由の一つに、職員の暴走や私物化を防ぐという側面がある。文化施設は市民のもの。アーツ前橋、市民組織（アーツカウンシル）、市民の３つがあるからこそ、全国のプロトタイプになれるのではないかと確信している

入内島：市民参加も大切だが、前橋にアーティストが実際いるのかどうか、また、住んでくれるかどうかということの方が重要だと思う。

山本市長：実は前橋にはクリエイティブな人はたくさんいる。小栗康平監督、飯塚俊男監督、清水崇監督、イラストレーターの高荷義之など、彼らの力をどう引き出していくかが住友さんの力。アーツ前橋が、街に内在する力を発揮できるような昇華装置になってもらいたい。

住友：前橋市内に多くのアーティストが住んでいることは必要。

〇無関心層について

山重徹夫（中之条ビエンナーレディレクター）：アーツ前橋を担う市民の裾野をどう広げていくのか、具体的な考えを聞きたい。中之条の人たちの多くはアートに関心なかったが、中之条ビエンナーレに来る若い人たちや滞在するアーティストたちと交流する中でイベントに対し好意的になっていった。

＊当日のカフェの様子

住友：無関心層に足を運んでもらえるようなきっかけ作りが重要。だから、教育普及や広報に力と人とお金をかけている。子どもの頃から美術館やアートに親しんでいれば、アレルギーにならない。みんながアーティストにならなくてもいい。自分と違う考え方や感じ方を持つ人がいるということを伝える場があることは、感性を育む際に大きな影響がある。無関心層は急に減るわけではない。10 年、20 年、30 年と長い時間をかけることが必要。子どもたちが自由に表現し、自らの思いを人に伝え共有していくことができるかどうかは今後、社会で生きていくうえで大きな力になっていくはず。今の教育では、その力を得るのはなかなか難しいからこそ、美術館の存在価値や可能性は大きい。オシャレやファッションを趣味にする人

は増えているが、それは表層的なこと。生きる力を身に付けるには、最終的には文化や美術に触れることが重要になってくると思う。

山本市長：裾野を広げていくには感動を伝えていくしかない。そのためには、感動をキーワードによってつなぎ合わせていけるような人材が重要になってくる。

○中之条ビエンナーレが街にもたらしたもの

入内島：中之条町を含め中山間地の人口はどんどん減っている。自分たちの街に対して自信をなくしている。県内外から若い人がたくさん来てくれたことで、自分たちの暮らす地域は良いところなんだと感じられるようになった。中之条ビエンナーレは、町の人たちに故郷を今一度、見直す良いきっかけを与えてくれた。だからこそ価値がある。

○アーツ前橋に期待すること

参加者：パリに住んでいたが、その地域の小学校ではアーティストのアトリエを見学する授業が義務付けられていた。協力するアーティストの方にもちゃんとお金が支払われている。教育の一環として、子どもも作家も育てる仕組みになっていた。前橋もこのようなカリキュラムを組んだら良いのではないか。

住友：美術館に行くこととアトリエに行くことは全然違う。美術館には完成作品が並べられているが、アトリエには未完成の作品がある。アーティストと触れ合うこと、制作過程が見られることは、ワクワクする体験なので凄く良い。子どもだけでなくアーティストを支援する仕組みにもなっている。ちなみにアーツ前橋では、子どもたちにアートに親しんでもらえるよう、休館日を使って自由に館内を楽しんでもらう「おしゃべりアートツアー」を行っていく。今、地域の学校に呼びかけているが、参加したいという学校はどんどん増えている。

山本市長：学校における美術教育も、市民による文化芸術の視点で指導して欲しい。

○アーツ前橋のプレイベントをきっかけに生まれた市民活動

寺澤徹（未来芽プロジェクト代表）：アーツ前橋が行ったアーティストインレジデンスで市内に滞在していたアーティストの照屋勇賢さんの作品を、市民で共同購入しオープン後のアーツ前橋に寄贈しようという活動を 2011 年夏からスタートさせている。３・11 直後の３月 12 日から１週間分の上毛新聞の１面に小さな無数の芽を立ち上げた作品。照屋さんが市内滞在中に制作に取り掛かり、ニューヨーク帰国後に完成させた。一つひとつの芽を買ってもらおうという活動で、現在、160 人近くの協力者がいる。賛同者は県外にも広がっていて、最近は山口県のファミリー５人が芽を購入してくれた。また、集まったお金は照屋さんのポケットに入るのではなく震災支援活動に使っていく。既に、集まったお金の一部を震災支援をテーマにした水戸芸術館の展示事業に寄付させてもらいました。

○市民参加で大切なこと

中島：市民参加で大切なことは何か。ＮＰＯまやはしの理事長として長く実践している野本さんから意見を聞きたい。

野本文幸（ＮＰＯまやはし理事長）：市内にある遊園地「るなぱあく」を運営している指定者管理団体だが、施設を運営していく中で行政がどういうスタンスでいるかが重要なポイントになってくる。行政の姿勢は市長が変わると変わるので。あとは、お金の問題が深く絡んでいる。この２点をどう担保してやっていくかが非常に重要になってくる。なおかつ、それは行政の責任ではなく、それを見ている市民一人ひとりの問題。市長や行政の責任と言っていてもダメで、市民がどこまで責任をもって関われるかどうかを一人ひとりが真摯に考えなければいけないと思う。

山本市長：政治が芸術文化から一定の距離を置こうというのが私の理念。アーツカウンシルが文化を評価し、市民がまた新しい企画を持ち込む。そのサイクルが出来れば、政権が代わっても市民による芸術活動は続いていく。閉鎖的ではいけない。踊ったり、歌ったり、多様な芸術文化活動をしている全ての人に開かれたものでなければダメ。見守っている。予算を確保するのが私の最大の責任。

○アーツ前橋のミッションについて

参加者：色んなことに挑戦するのはいいことだと思う。しかし、市の予算を使って行うことなので、どう活動していくのかというアーツ前橋としての使命がなければいけない。今はその方向性が全く見えない。何をやりたいのかが分からない。学校に対して、市民に対して、どうアプローチしていきたいのか、その目標を定めてもらえると分かりやすいのではないか。それがスタートでこういうことをやりたいという目標を定めてもらってもらえば分かりやすいのではないか。

住友：限られた予算の中で優先順位を決めていきたい。1500 平米という展示スペースなので、何でもやれるわけではない。アーツ前橋周辺には、県立近代美術館や高崎市美術館や渋川市美術館など、たくさんの美術館が密集している。ここに暮らす人たちは文化を存分に享受している。その中

＊当日のカフェの様子

で我々の使命は何か。他館とは違う役割が求められている。啓蒙型の美術館ではない施設を目指したい。まだ対外的に発表していないが、アーツ前橋のコンセプトを３つ掲げるつもり。まずは創造的であること、新しいものを作ること。２つめはみんなで共有すること。そして３つめは対話を通じてみんなが話し合い伝えていくこと。展覧会というカタチだけではないことを試していくことが大切。ほかの美術館が果たしている役割とは違う個性を持った活動ができるのではないかと思っている。10 月のオープン以降、具体的な事業を行っていきたい。

入内島：今なにが日本に足りないかを考えた方がいい。人それぞれの価値観を見直した方がいい。生きるとはどういうことなのか、どこに幸せがあるのかを考えた時、良い作品に触れた時、幸せな気分になれる。その積み重ねがいい人生に繋がっていく。アーツ前橋のミッションは、地域の人に幸福感を味わってもらうことになるのでは。行政の仕事も突き詰めていけば、一人一人の市民が幸せとおもえる人生をどれだけ手助けできるかというところにある。

参加者：美術館が持っている役割は心の部分を豊かにすること、私たちが受けている心のデフレ化脱却を担ってほしい。

山本市長：芸術文化の素養はないが、芸術文化が前橋を元気にするだろうという確信はある。借り物ではなく、市民みんなが作り上げていくものに価値がある。住友館長には、出来るかぎり前橋市民の力を引き出してほしい。僕たちの子どもたちが、アートでご飯を食べていけるように。そんなアーティストを作っていくことが新しい成長になっていくのではないか。

住友さんや皆さんの力でアーツ前橋を引っ張っていってほしい。

喜多村議長挨拶：山本市長、入内島さん、住友さん、本日は大変有意義なお話をありがとうございました。

前橋文化推進会議では、メンバー９人がそれぞれの立場で、どうすればアーツ前橋がもっと良くなるかを考えています。単一な芸術活動や文化活動だけに注力するのではなく、より広範な、そして質の高い文化とは何かということに真摯に取り組んでいきたい。本日参加された方も、ぜひ感じたことを声に出し行動していってほしいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

3rd

多くの方にご参加いただきありがとうございました。